

病虫害発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2301

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病(紀北地域) ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ ニカメイチュウ イネミスゾウムシ	並 並 並 やや多 並 並 並 並 並	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ アブラムシ類	並 並 やや少 並 並 並
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 かきタアザミウマ フジコナカイガラムシ	並 やや多 並 並 並
ウリ類	モザイク病 べと病 うどんこ病 疫病 つる枯病	並 並 並 並 並	モモ	せん孔細菌病	やや少
			野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	並 並 並

気象予報

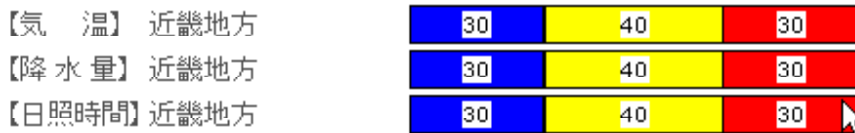
1か月予報(予報期間 5月21日から6月20日 大阪管区气象台)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
6月	和歌山 23.0	和歌山 189
	潮岬 22.0	潮岬 352

I. 水 稲

1. いもち病（苗いもち、葉いもち）

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 紀南早植え地域の常発地では気象条件に注意し、薬剤防除は早めに行う。

② 紀中、紀北の普通期栽培地域では、キヌヒカリ、コシヒカリなどの罹病性品種を作付けする場合は、育苗箱処理剤を施用する。

2. 紋枯病 紀南地域

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 気温が高まると病勢が進展するので常発地では発生に注意する。

3. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

（1）予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並

縞葉枯病（紀北地域） 発生量 やや多

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭（平年紀の川市0.1頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0.1頭）である。

② 本年のヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市で14.7%（前年15.3%）、かつらぎ町で12.7%（前年19.1%）であった。これらは、平成3～12年の平均（2.8～3.4%）より高い。

（3）防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱処理剤を施用する。

③ 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

④ 平成23年度の病害虫発生予察注意報第1号（4月25日付け果第2076号）を参照する。

4. ツマグロヨコバイ

（1）予報内容 ツマグロヨコバイ 発生量 並

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市0頭（平年0.0頭）、上富田町1頭（平年0.0頭）、那智勝浦町0頭（平年0.1頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 前年にツマグロヨコバイの発生が多かった地域では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

5. セジロウンカ

（1）予報内容 発生時期 やや遅 発生量 並

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭（平年紀の川市0.2頭、上富田町1.3頭、那智勝浦町0.9頭、初飛来の平年：5月

- 3 半旬) である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

6. トビイロウンカ

- (1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭(いずれの地域も平年0.0頭、初飛来の平年:7月2半旬)である。

7. ニカメイチュウ

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、いずれの地域も0頭(平年紀の川市0.1頭、上富田町0.0頭、那智勝浦町0.0頭)である。
- ② フェロモントラップ(紀の川市)による5月の誘殺数は4半旬現在、0頭(平年0.4頭)である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 前年に発生が認められたほ場では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

8. イネミズゾウムシ

- (1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、上富田町で54頭(平年7.2頭)と平年に比べ多かったが、紀の川市は0頭(平年1.1頭)、那智勝浦町は30頭(平年27.2頭)と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 有効な成分を含む育苗箱施薬を行っていないほ場で、田植え3~7日後に成虫による食害株率が30%あるいは50株あたり成虫数が12頭を越える場合(5%被害許容)は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<ウリ類>

1. モザイク病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培キュウリ、施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、いずれも0%(平年0%)と平年並であった。
- ② 紀中地域の施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、ともに0%(過去3年間の平均0%)であった。
- ③ アブラムシ類の発生は平年並と予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. ベと病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、50%（平年58%）、施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は47%（平年58%）と、ともに平年並であった。
- ② 紀中地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、83%（過去3年間の平均51%）とやや多い傾向であった。
- ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 薬剤防除は予防散布を重点に、葉裏に十分かかるように行う。

3. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀北地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、50%（平年50%）と平年並で、施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は33%（平年47%）と、やや低かった。
 - ② 紀中地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、92%（過去3年間の平均58%）で多い傾向であった。
 - ③ 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
 - ④ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培やトンネル栽培では通風をよくし、薬剤防除は薬液が葉裏にも付着するようていねいに散布する。

4. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀北地域の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、0%（過去5年間の平均0%）であった。
 - ② 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月4半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。
 - ② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

5. つる枯病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀北地域の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（平年0%）であった。
 - ② 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月3半旬現在、0%（過去3年間の平均0%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布は株元中心に行う。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月4半旬現在、ワタアブラムシの発生ほ場率50%（平年56%）、1葉あたり寄生虫数0.2頭（平年0.2頭）と平年並であった。
 - ② 黄色水盤（紀の川市）への5月の飛来数は4半旬現在、61頭（平年227頭）と平年に比べやや少ない。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月4半旬現在、1葉あたり寄生雌成虫数はカンザワハダニ0.1頭（平年0.3頭）、ナミハダニは0.1頭（平年0.4頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

3. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月4半旬現在、発生ほ場率43%（平年48%）、1葉あたり寄生虫数0.1頭（平年0.2頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生の多い場合は4～5日間隔で、2回以上連続散布を行う。
 - ② ハウス栽培は収穫終了後に、蒸し込みを行なう。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 近年、剪定枝の放置園や管理不良園等も多くなっており、枯れ枝量も多く菌密度は高いものと思われる。
 - ② カンキツの開花盛期は、ウンシュウミカン（「興津早生」）で5月15日と平年より約7日遅かった。「清見」は5月18日と約6日遅かった。今後の生育は平年並と予想される。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 第1回防除（5月下旬）を実施していない園では早急（6月上旬）に薬剤散布を行う。第2回防除は6月下旬とするが、第1回防除からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。薬剤はマンゼブ剤またはマンネブ剤とする。
 - ② 枯れ枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① カンキツの開花盛期は、ウンシュウミカン（「興津早生」）で5月15日と平年より約7日遅かった。「清見」は5月18日と約6日遅かった。今後の生育は平年並と予想される。
- ② 県予察ほ場（無防除）における越冬病斑量は平年に比べ少なく、春葉における初発は5月24日（平年：5月23日）と平年並であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 罹病性品種、常発園や春梢発病の認められる園では銅水和剤（炭酸カルシウム剤200倍加用）を散布する。
- ② 罹病性品種や常発園では、罹病枝葉の剪除及び防風施設の整備に努める。
- ③ 今後、強風雨があれば発病が多くなる可能性がある。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場における5月中下旬の発生は、マシン油乳剤散布園においてみられず、無防除園では、雌成虫と若齢幼虫がわずかにみられた。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行なうと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期

第1世代1令幼虫最盛期 6月2半旬 （平年6月1半旬）

同 2令幼虫最盛期 6月5～6半旬（平年6月4～5半旬）

同 雌成虫初発日 6月6半旬 （平年6月5半旬）

発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 果樹試験場内の県予察ほ場（無防除）での第1世代1令幼虫の初発は5月24日（平年：5月16日）にみられ、やや遅かった。
- ② 昨年10月の巡回調査では、発生園率は5.9%（平年7.5%）、寄生果率は0.3%（平年0.5%）と平年並で、雌成虫の越冬量も平年並であると考えられる。

(3) 防除上考すべき諸点

- ① 多発園では、2令幼虫最盛期にマシン油乳剤や有機リン系の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除）における初発時期および発生量は平年並であった。
- ② 日高郡由良町の現地ほ場に設置した黄色粘着トラップにおける初発時期は平年並で誘殺数はやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果により、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）、各地域とも発生時期は平年並で、発生量も平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 各園地の発生の状況を把握し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月中旬の巡回調査では、「富有」の発病葉率は0%（平年0.2%）と平年並であった。
 - ② 昨年10月の巡回調査では、「富有」の発病葉率は24.4%（平年値34.6%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏を丁寧に散布する。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 円星落葉病 やや多、角斑落葉病 並
- (2) 予報根拠
 - ① 昨年10月の巡回調査では、「富有」における円星落葉病の発病葉率は7.0%（平年1.5%）と平年よりやや多く、角斑落葉病の発病葉率は20.8%（平年21.8%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 円星落葉病の子のう胞子飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。
 - ② 防除は有機銅水和剤、マンゼブ又はマンネブ水和剤とする。

3. カキクダアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月中旬の巡回調査では、越冬虫による被害葉率は「富有」で0.1%（平年0.1%）、「刀根早生」・「平核無」で0%（平年0.1%）と平年並であった。
 - ② 黄色粘着板による4月の誘殺数は18頭（平年6.5頭）と平年よりやや多かった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

4. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月中旬の巡回調査では、「富有」の寄生花蕾率は1.6%（平年1.7%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 本種の防除には孵化幼虫の成育ステージが揃う6月上中旬の薬剤散布が重要である。多発園では散布量を使用基準の範囲内でできるだけ多くして、ていねいに散布する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 5月中旬の巡回調査では、被害葉率は0.3%（平成1.8%）とやや少なかった。

② 4月中旬～5月上旬における感染好適条件（最大風速10m/s以上、かつ降水量5mm以上）をみたす日数は2日（平成1.71日）で平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨前の予防散布に努める。

② 防風ネット、防風樹の設置などの耕種的防除に努める。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部での本年の越冬量は、0頭（平成0.2頭（極端に越冬量が多かった年を除く））と、平成並であった。

② 県南部における越冬箇所率は0%（平成22%）で、少なかった。

③ 5月上旬以降、果樹園への飛来および予察灯への誘殺数は平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹園への飛来と被害に注意し、被害がみられる場合には薬剤散布を速やかに行う。

② ウメ・モモ・スモモなどの果実被害（主に山間部周辺）に注意が必要である。

③ 県農林水産総合技術センターのホームページの果樹カメムシ情報を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/>

[boujyosyo-yosatsujyohou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2301)までお願いします。